

日本海スルメイカ漁場調査 一抄録一

(東奥丸：日本海沖合海域・青鵬丸：日本海沿岸海域)

鈴木 史紀・田中 裕憲・田村 眞通・青山 宝蔵

発表誌名

イカ釣り漁場開発資料XV（平成4年3月）及び平成元年・2年度外洋性イカ（スルメイカ、アカイカ）に関する生物測定、標識放流、海洋観測基礎資料集（平成4年3月）

抄録（日本海沖合海域漁場調査）

5月から9月に試験船東奥丸により、北緯37度から北緯45.5度の日本海沖合海域で北上初期から南下初期の群を対象に漁場調査を実施した。

1. 日本海沖合域におけるスルメイカの水揚げ動向

日本海沖合域のスルメイカは主として凍結して水揚げされるが、本県での主たる水揚げ港である八戸港には22,064トン（1990年12月末）が水揚げされ、昨年同期比の107%であった。

2. 漁場環境

調査海域における100m深の漁場環境をみると、5月下旬の北緯37度から北緯41度の水塊配置は、北緯39度・東経139度付近に冷水の差し込みがみられたほかは平行型のタイプであった。6月上旬から中旬では北緯38.5度と北緯41度に冷水の差し込みがみられた。7月下旬から8月上旬の北緯41度以北の海域では陸岸と平行な水塊配置であった。9月では北緯38度から北緯44度のうち、北緯40度以北では陸岸と平行な水塊配置であったが、大和堆周辺では冷水の差し込みがみられるなど顕著な潮境が形成されていた。

3. 分布密度（釣機1時間1台当り漁獲尾数）

5月から8月の北上群における（本県沿岸域の漁場を除く）分布密度は全般に低く（2尾以下が主体）、濃密な群はみられなかった。9月中旬以降の南下群の密度は10尾以上の海域の出現も見られ安定していた。漁場環境（100m深水温）は北上期では水温5℃から10℃、9月の南下期では水温2℃から8℃の海域に密度が高い傾向にあった。

4. 群の移動

南下群を対象に奥尻島西沖並びに大和堆北沖海域で標識放流を実施したが、再捕率は0.7から1.0%であった。移動方向は南西から南南西で、従来と同じパターンの移動であった。

5. 群の性状

本調査海域における群の性状は、漁期初めは春・夏、秋生まれ群であったが次第に秋生まれ群が主体となり、9月には秋生まれ群並びに冬生まれ群の構成となった。

抄 録（日本海沿岸海域調査）

6月から8月に試験船青鵬丸により、本県日本海沿岸域から北海道積丹半島以南の沿岸域においてスルメイカの北上期から南下初期の群を対象に漁場調査を実施した。

1. 沿岸域におけるスルメイカの水揚げ動向

本県日本海沿岸の主要4港（小泊、下前、鯨ヶ沢、深浦）における1990年のスルメイカの水揚量は3,613トンで昨年を下回ったものの、ここ10ケ年では高い水準であった。1隻1操業当たり漁獲量も昨年の420kgをやや下回り370kgであったものの、ここ10ケ年では高い水準であった。

2. 漁場環境

3月から9月までの青森県日本海定線海洋観測結果から対馬暖流の勢力をみると3月から5月は強勢、6月から7月は平年並みに戻ったものの9月には再び強勢に転じた。

3. 分布密度（釣機1台1時間当たり漁獲尾数）

漁期前対馬暖流の勢力が強かったことから、漁期初めから沿岸域への来遊量が多く、5月下旬（東奥丸調査）から6月にかけて行った調査でも比較的安定した密度であった。

4. 群の移動

北上群を対象に津軽海峡西口で実施した標識放流によると、放流海域周辺で再捕された群、北海道西海岸を北上し石狩湾まで移動した群、津軽海峡を経て岩手県沿岸部に移動した群がみられ、再捕までの経過日数は放流海域周辺で9日から57日、北海道西海岸域で21日から92日、太平洋に移動した群は40日から50日であった。

5. 群の性状

本県日本海沿岸域では5月は春・夏、秋生まれ群が主体、6月は春・夏、秋、冬生まれ群の3群で構成、7月は秋、冬生まれ群、8月は秋生まれ群が主体、9月は冬生まれ群が主体となっていた。